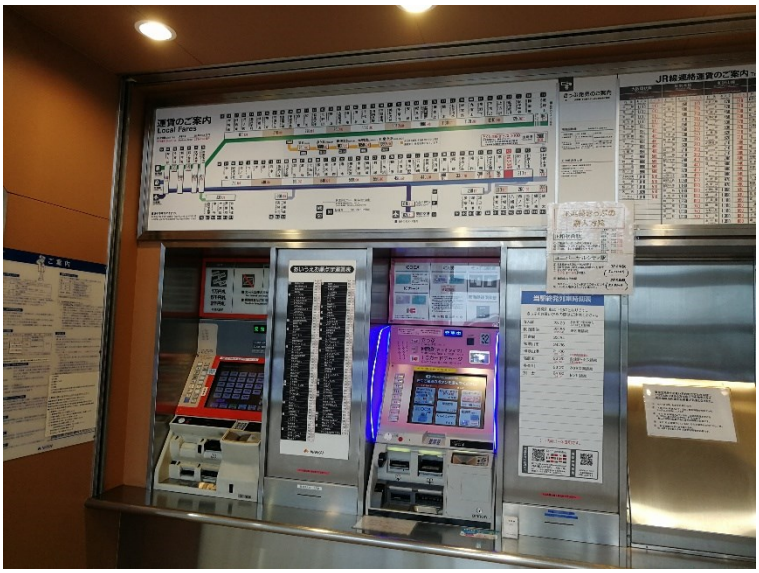
ちょうどいい

李嘉璐
交換留学生　中国

日本に来る前に、日本が細部を重んじることについて耳にした。この一ヶ月の留学生活の中で､私は日本の入念さと細かい点を重視することによってもたらす温かさを実感する。一言で言えば、それは「ちょうどいい」である。

自動販売機の隣でドリンクを飲み干して缶を捨ててようとしたとき、ちょうどそのそばに缶のゴミ箱がある。ダイエットをして、おかずを注文しようか迷ったとき、ちょうど食品ごとにカロリーが表示されているのが目に入る。コンビニで会計しようとして、持っているものが多すぎて困っていた時、ちょうどカバン置きが手近にある…その中で私が最も言いたいのは券売機だ。

ゴールデンウィークで関西地方を 3 日間も遊び、毎日 3、4 回電車に乗った。しかし、このように大勢の観光客がいるゴールデンウィークに、チケットを買うたびに前に空いた券売機があった。運がいいだけなのかもしれないが、それは主に券売機の設計によるおかげなのだ。



まずは機器の近くに詳しい案内板がある。料金を調べて直接購入すればいい。次に、人数を示すボタンがあり、シングル・ダブル・大人一人と子ども一人等、様々な家族を想定したボタンがそろっており、瞬時に勘定できる。ボタンを押すだけで、大人二人と子ども一人の家族連れの切符が買える。非常に便利ではないだろうか。

ちょうど良いところに案内が目の前にあり、ちょうど良いところにボタンがある…たくさんのディテールのおかげで、連休にしても、駅でチケットを買うとき、あまり時間がかからなかった。

上記の例はすべて日本のデザインがもたらす快適さだ。それでは、そのような優しい施設を発明することができる日本人についてはどうなのだろうか。

学校の図書館のお手洗いに姿見がある。鏡の前で服を整理していたとき、ドアのガラス越しに廊下に歩いていく姿を見た。誰かが通り過ぎただけと思って気にしなかった。
トイレから出て、近くの本棚の前で本を持っている女の子を見た。私が出てくるのを見た彼女は軽く会釈して、本を棚に戻してトイレに入った。

この時はっと気づいた。さっきドアの外にいたのは彼女だったのだ。

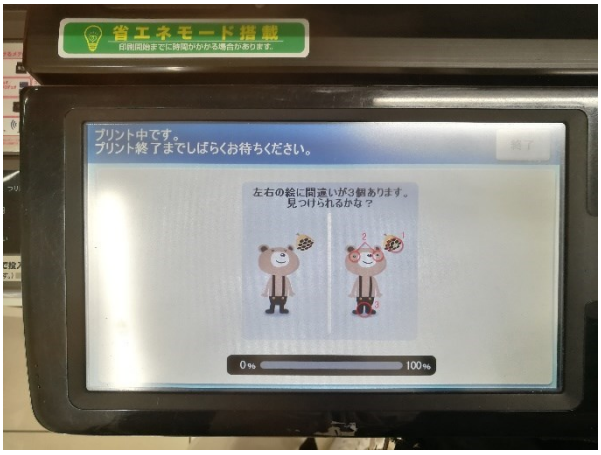
なるほど､「中に人がいるようなので、不便や気まずさを避けるため、相手が出てくるのを待ち、相手が出るとまた自分が入る」。このような「ちょうど」の擦れ違いの裏には、実

際には繊細な心があるのだ。

「ちょうど」とは、つまり気持ちがぴったり合うということだ。どうして日本も日本人もこのような思いやりがあるのか。

「壊れやすいものを送る時は、必ず柔らかい綿で端の部分を包む」と言われるように、日本も同じなのだ。

わずかな、細かなところから、さまざまな「ちょうど良い」を作り、人の心にぴったり寄り添う。



混み合うバスで「降りたい」と言うのが恥ずかしい時に、ちょうど降りボタンがすぐそばにある。コンビニでコピーする時、機械の作動を待っている間に、ちょうどスクリーンで暇を潰すためのゲームが飛び出す……このような例は私の生活の周りに溢れ、1枚の紙で挙げられないほど多い。細部に関心を持つからこそ、日本は何気なく小さなところで人の心を動かすそういう国になったのだ。